Movie Review　33　#母なる証明

『#母なる証明』(2009 年：ポン・ジュノ監督）を amazon prime video で再視聴した。監督は 2019 年貧困層と富裕層の格差問題をエンターテイメントチックに描いた『パラサイト　半地下の家族』でアカデミー作品賞、監督賞、脚本賞を受賞。『殺人の追憶』、『グエムル-漢江の怪物-』で国際的に高い評価を獲得。本作はカンズ交際映画祭の「ある視点」部門に正式出品。2016 年、フランス芸術文化勲章オフィシエを受章。

映画のオープニングは野原で中年女性が踊り狂っているシーンで始まる。見終わって振り返ると、これで本作の「母親の愛情とその裏に潜む狂気」を物語っているように思える。これだけで観客はこれからどうなるのと、作品に引き込まれる。冒頭にこんなシーンを入れるところが奇才なのかもしれない。

知的障害のある息子（アスペルガー症ではないかという意見もある）T を、母親は常に心配しながら見守り続けている。ある日、T はナンパしようとした少女に逃げられた。その翌日、その少女は屋上で死体となって発見され、T は殺人容疑で逮捕された。息子が殺人など犯すはずがないと信じる母親は、警察や弁護士に追いすがるが、その努力も無駄と知り、自らの手で事件を解決しようと奔走する。奔走するうちに、T が殺害した現場を目撃したという男に遭遇する。果たして T は犯人なのか。この男に母親はどう対応するのか。

ひと騒動あった後、真犯人が逮捕され、T は保釈される。真犯人はダウン症の日本人という設定で、ここに監督に反日感情を深読みする視聴者もいるようだ。

最後、バスの中で母親が踊り狂うシーンでフェードアウトして終わる。踊りで始まり、踊りで終わる。

先に視聴した『殺人の追憶』は犯人未確定で終わっている（数年後に犯人は捕まっているそうだが)。サスペンスだけでなく、社会背景や精神心理、家族への愛、等々、様々なことを考えさせられる作品である。